

〈公開講演〉

比較思想と早稲田大学

私の中の比較思想

「比較思想と早稲田大学」と題するこの公開講演に関連して、二十一年前、本学会の創立大会での記念講演「私の中の比較思想」をまず引き合いに出したい。

この記念講演は故松浪信三郎教授（早稲田大学）によってなされたが、松浪教授はJ・P・サルトルの名著『存在と無』を翻訳され、フランス哲学ないし実存哲学を専攻とする研究者として知られていた。（じじつ、松浪教授は晩年に、『フランス哲学史論集』を編んでいる。）その松浪教授が東洋思想・日本思想にもわたる「私の中の比較思想」を語るとは、意外の念をもって迎えられたのも、不思議ではない。

しかし、松浪教授は西洋哲学の面でもただちに現代哲学ではな

峰 島 旭 雄

く、当時、東京大学から早稲田大学へ講師に見えておられた出隆教授に就いてギリシア哲学から西洋哲学研究を始めたのであり、さらに早稲田大学における東洋思想の傑出した学者であった津田左右吉博士の影響をうけ、儒教・道教にも関心を向け、また学外の同好の士の集まりでは、宇井伯寿博士（中村元博士の東京大学での恩師）の仏教に関する指導を受けたのである。このようなことから、本学会の創設にあたり、記念講演者として松浪教授を強く推したのはほかならぬ中村会長（現名誉会長）であり、記念講演を引き受けた松浪教授はその演題として「私の中の比較思想」を選ばれたのであった。

この演題は私どもの比較思想学会の発足にあたりきわめて適切なテーマであったと同時に、少なくとも次の二つのことを私どもに示していると言えるであろう。

一つは、「私の中の比較思想」なるものは、私どもが日本において日本人として日本文化を背景に、近現代日本を生き抜いていく線上で、比較思想なるものを遂行するうえで、避けて通れない事態であるということである。もう一つは、その同じことが、私ども早稲田大学の創立以来の学問の歴史・研究史・思想史の特色を形づくっているということである。その意味では、松浪教授の「私の中の比較思想」は、これら二つの比較思想のありようをよく示す範型であると言いうことができるであらう。

さらに、もう一つ付け加えるべきことがある。私どもの比較思想、比較思想学・比較思想研究は、その基本的な条件として、これにたずさわる者に対して少なくとも一つの専攻学問分野を有ししかもそれが世界的水準に達する、ないしは迫るといったほどの深い学識を保持していることを求めるということである。松浪教授はフランス現代哲学、サルトル研究においてそのような水準にあった。しかも、そのような学問上の一つの狭い分野に拘泥することなく、いわゆる学問上のセクシヨナリズムに陥ることなく、自由にしてフレキシブルな研究態度、学的関心を保有していた。「私の中の比較思想」からはこのような学問的要請をも汲み取ることができるとであらう。

大隈重信・朝河貫一ほか

本大会では、この公開講演のほかに、記念展示「比較思想と早

稲田大学」が催されているが、それには「大隈重信・ゴルドン夫人・朝河貫一」という副題が添えてある。公開講演には「大隈重信・朝河貫一ほか」という副題がついている。そして午前中の個人研究発表に、中村悦子氏の「E・A・ゴルドンの人と思想——その仏耶一元論への軌跡——」があり、これら三つのもの、公開講演・展示会・個人研究発表がいわば三位一体となって、「比較思想と早稲田大学」というテーマを提示しようとする。

ここで、公開講演の副題が「大隈重信・朝河貫一ほか」となっていることに注意を引きたい。

この副題では、「ゴルドン夫人」は記されていない、中村悦子氏の研究発表にゆずっているのであるが、やはりゴルドン夫人についても若干触れざるをえないところから、「ほか」という表現になっている。しかし、この「ほか」にはまた別の意味も含蓄されている。それは大隈重信・朝河貫一、そして若干触れるゴルドン夫人以外にも、二、三のことを述べようとするからにはかならない。早稲田大学の学問、創立以来の學術研究の歴史、近現代日本の学問形成・進展の歴史、あるいはひろく日本近現代思想史の中の早稲田の学問というものを検討してみると、そこにいくつかの特色を指摘することができる。

よくいわれる早稲田大学の在野精神、反アカデミズムということも、当然そのような特色の一つとして挙げられるであらう。しかし、ある意味ではそれよりもっと早稲田大学の学問・思想を

特色づけるものがあると考えられる。それは「早稲田とその周辺」と言い表わされるであろう。

例えば、明治期に、早稲田大学の前進、東京専門学校出身者、綱島栄一郎、(号)梁川は、「見神の実験」を発表し、一世を風靡した思想家であって、石川啄木や魚住折蘆など青年層の渇仰の的となった。しかし綱島は正式には早稲田大学の教壇に立つことはなかった。彼の『春秋倫理思想史』(一九〇七年)は東西倫理の比較を意図する倫理思想史であったが、未完に終わった。このような学者・思想家を「その周辺」という表現で言い表わしたい。

もとより早稲田大学において教授であり、学界に思想界に活躍した人物も、多数輩出している。学内では西洋史・政治学・倫理学の正教授であると同時に、『太陽』誌に健筆をふるい、かの大日本文明協会(大隈重信の設立にかかる)の編集長としても活躍した、浮田和民のごときが、その好例である。ただそのような中核に対してその周辺があり、この周辺によって早稲田大学の学問、ひいては比較思想の学が、広がりや深みを増していることも事実である。朝河貫一やゴールドン夫人もまた、じつはそのような周辺人であったのである。

さらに付け加えると、これから述べる事柄ないしは取り上げる人物は、私どもが「比較思想」と聞いてただちに思い浮かべるような事柄ないし人物であるとは限らないということである。それどころか、いわゆる「比較思想」に対しては、側面から、ときに

真つ向から、批判し反対する立場にあるとさえ言えるのである。

他の例を挙げると、「宗教哲学」というとき、どのような射程を考えてよいか、あるいは考えるべきか、ということである。もとより、いわゆる宗教哲学なるものを肯定し、宗教の存在を肯定しているもののみを、宗教哲学の射程に入れるであろうが、宗教批判・宗教否定の立場もまた、宗教哲学そのものではないとしても、宗教哲学なるものの射程には入れる必要があるのではないだろうか。

そのような意味では、パラドクシカルな言い方ではあるが、批判や否定の立場もまた、ある意味では、裏返した形で、その学的模索の一齣であるということが出来る。比較思想についても同様である。比較思想に対する批判の立場、否定の立場もまた、比較思想そのものではないとしても、なんらかの意味で、比較思想というまだ新しい学問の基礎づけ(Begründung)にとっては、必要であり、避けて通れない、むしろ本質的な部分である、と言いたい。このこともまた一種の周辺である。早稲田大学の学問を比較思想という観点から斜めに見ていくと、このような意味での「周辺」が浮かび上がってくるのである。

大隈重信と「東西文明の調和」

次に、具体的大隈重信・ゴールドン夫人・朝河貫一について述べよう。

大隈重信（一八三八「天保九」—一九二二「大正一一」）は政治家であり、二度首相となり、政党政治への道を開き、明治から大正へかけての近代日本の政界に大きな力があつたわけであるが、明治十四年の政変で下野し、明治十五年、東京専門学校を設立し、それが現在の早稲田大学となっていることは、あらためて言うまでもない。早稲田大学に対しては慶應義塾大学、そして大隈重信に対しては福沢諭吉というコントラスト、あるいは連想というものがすぐ生じる。福沢諭吉は明治啓蒙思想家の最たるものとして、また『文明論之概略』をはじめ著作活動によって、思想家、あるいは脱亜入欧のオビニオン・リーダーという印象があるが、大隈重信の場合は、まずもって思想家であるとか、文化・文明にかかわる仕事・業績があるとすぐ思い浮かぶ人物ではない。

しかし、じつは大隈重信は早くから西洋の文化・文明の摂取、東洋の文化・文明の究明、そして両者、つまり『東西文明の調和』ということに関心があり、あまり知られていないが、その方面で大きな、注目すべき仕事をなしとげ、業績を挙げているのである。それは、例えば、『開国五十年史』という編著に示されている。これは、明治期における西洋文明との接触を通じて各分野においてどのような変化と進展が見られたかについて、それぞれの専門研究者に執筆させ、自らもその「序説」を書いたものである。大隈重信は、このようなとりまめを行うと同時に、明治四十一年、七十一歳のとき、「大日本文明協会」を設立したのであ

る。

「大日本文明協会」の主たる事業は、出版であり、とりわけ当時海外で刊行された、「これは」と思う諸分野の、しかも良質な書を、ただちに翻訳刊行することが、その事業の中心をなしている。例えばローリエ『比較文学史』、オイケン『宗教の真諦』、ラッセル『社会改造の理想と実際』、エレン・ケー『婦人運動』、ブートルウ『科学と宗教』等々。第一期刊行から第四期刊行にいたるまで、じつに四百数十冊に達し、大正十一年の大隈重信の死去の後も続けられ、昭和十年代にいたっている。「大日本文明協会」は、ただ本を出すというだけでなく、しばしば学術講演会を催し、時局研究会を開き、これらの成果を冊子の形で刊行、また「協会ニューズ」を出し、明治から大正へかけての、一大文明運動をなしたのである。このようなことは大隈重信一人ではなしえない。浮田和民・市島謙吉・金子馬治（筑水）・塩沢昌貞等のサポートがあつた。これらの人々はまさしく「大隈重信とその周辺」であつたのである。

この方向での大隈重信の歩みは、『東西文明の調和』の主張、研究、ならびに出版で、クライマックスを迎える。『東西文明の調和』の主張は、明治期、早くからなされており、大正期へ入って、『東西文明の調和を論じて帝国の将来に及ぶ』（大正五年）という講演が、「大日本文明協会」でなされた。その頃、つまり第二次大隈内閣の成立、対華二十一ヶ条の要求などのあつたらしい国

内外の政治のはざまで、毎週金曜日は、この日一日をあけて、西洋思想・文化、とくにギリシアの面では金子筑水、東洋思想・文化、とくに古代中国の面では牧野謙次郎を相手に、それぞれの研究を聴取し、自らも関連の書を読み、遠大な計画で、かかる研究を大隈老侯の楽しみとして、六、七年にわたって続けたのである。残念ながら、大隈重信は、このような楽しみの中で、大正十一年一月十日、不帰の客となったのである。百二十五歳まで生きると豪語していた大隈重信であったが、享年八十五であった。

「遠大な計画」と言ったが、それは、このように西洋はギリシアに発し、東洋は古代中国に発し、これを中世・近現代へと及ぼし、領域としては宗教・哲学・倫理道德・教育・科学・文芸等々、およそ文化ないし文明と称せられるものの主要な分野にわたり、比較研究を行おうとしたのである。「志半ばにして」という表現がびったり当てはまるのであるが、自らの言う百二十五歳まで生きていたならば、あるいはこのような学問上の大事業も成し遂げられていたかもしれない。

没後、金子筑水が主としてとりまとめ、没年と同じ大正十一年十二月に、『東西文明の調和』が遺著の形で刊行された。〔早稲田大学出版部・実業の日本社および大日本文明協会頒布本として〕その内容は、ギリシア思想と中国古代思想とが両軸をなしているが、時として近代にも及び、また教育思想、科学思想にも触れていることに注目したい。いくつか顕著な項目を拾えば、「ギリシヤ古代

の宗教と支那古代の宗教」「ギリシヤ文明の全盛期と支那春秋戦国時代との比較」「老子とプラトン及ストア学派との比較」「荀子の思想とホッブス」など。

フランスのマソン・ウルセルが、『比較哲学』を刊行したのが一九二三年。比較思想なるものが一つのまとまった出発点をなすのはこの時期であるとみなされる。大隈重信の『東西文明の調和』は大正十一年、すなわち一九二二年の刊行であって、ほぼ同時期である。大隈重信が『東西古今の文化の潮、一つに渦巻く大島国』（早稲田大学校歌の一節）としての日本、日本文化を意識し、晩年の仕事としてかかる研究に打ち込んだ意気込みとその成果は、今日、あらためて再吟味・再評価されなければならないと考えられる。

コルドン夫人と「仏耶一元論」

次にコルドン夫人 (E. A. Gordon 一八五一「嘉永四」—一九二五「大正二四」) であるが、イギリスの名門の出身で、やはり名門のコルドン家に嫁し、夫コルドンの理解のもと、初めて訪れた東洋、日本に深い関心を寄せ、なかでも宗教として仏教とキリスト教との接触、影響・被影響について、専門的な研究を始める。マックス・ミュラーという比較宗教学の泰斗に師事し、その関係で日本の仏教学者、高楠順次郎とも知り会い、明治四十四年には、佐伯好郎という、日本というよりも世界における景教（ネストリウス

教」研究の第一人者の刊行した『景教碑文研究』に、「弘法大師と景教との関係——一名、物言ふ石、教ふる石」という論考を寄稿した。佐伯好郎は序文で、ゴルドン夫人の寄稿によって本書において世界のほとんどすべての景教研究（者）が網羅された、と述べている。

佐伯好郎も、ゴルドン夫人も、大隈重信のサポートを得ている。佐伯好郎は早稲田大学の名誉博士をさすけられ、ゴルドン夫人は滞日の間、大正初期に、名誉講師として早稲田大学で講演をしている。このようなことから、ゴルドン夫人は帰国にさいして、その蒐集した景教関係、仏基関係の書物、仏像や掛け軸類、二千数点を大隈重信を介して、早稲田大学図書館へ寄贈した。（今回の展示はその一部）

ゴルドン夫人は、景教研究を通じて、仏耶一元、すなわち仏教とキリスト教とは根源において一つである、あるいは、仏教・キリスト教間には歴史的にも教義的にもつながりがある、という結論、主張を提示した。「景教流行碑」が七八一年に西安（当時の長安）に建立されたが、それから二十三年のち、八〇四年に弘法大師空海が西安に到達している。したがって、景教と空海との間には影響関係が生じたことは十分に推測しうる、とゴルドン夫人は考えた。このように歴史的事実関係においても連鎖があるのみならず、「形」のうええ、また「言語」のうええ、そして「精神」のうええでも連鎖がある、とゴルドン夫人は主張する。

「形」のうええとは、敵島の山頂にある伝空海の木頭火と、キリスト教のユールログ（Yule log キリスト降誕祭に炉辺にたく木頭火）との類似であり、「言語」のうええとは、メシア（メサイア）の語と弥勒信仰のミロとの関連であり、「精神」のうええとは、「仏耶両教義を比較し、其間に於て喜ぶべき思想の融和を認めたり……此両者の間には真正なる精神的連鎖の確に存在せることを感ぜざるを得ず」ということであり、いずれも今日の学問のレベルから見れば、いまだ比較の初期ないし初歩の段階にとどまるものと言わざるをえないけれども、方法論的にこれを整理すれば、教義レベルでの比較、言語レベルでの比較、文化（象徴）レベルでの比較ないしは歴史的事実関係での影響・被影響ということ、三重、四重の手法を用いて、仏耶一元論を唱えたということが出来る。現在の「比較」という学問的操作の営為に対しても示唆するところがあると考えられる。

朝河貫一と比較法制史

朝河貫一（一八七三「明治六」——一九四八「昭和二三」）は福島県二本松の出身で、当時の福島中学、現在の安積高校を首席で卒業。この朝河貫一にまつわる逸話、伝説、神話めいたものがある。

中学時代、英語の単語を辞書で覚え、覚えたページは食べてしまい、結局全部覚え、食べてしまい、辞書の皮表紙だけ残り、これを校庭の隅にある桜の木の根元に埋めた、と伝えられている。

この桜は「朝河桜」と称され、今もって安積高校の校庭にある。

また卒業式総代として謝辞を述べるさい、突然、流暢な英語で話し始め、一同を驚かせた、とも伝えられている。さらに、当時としては珍しくこの中学校に外国人教師ハリファックスという先生がいた。ハリファックスは朝河少年の非凡な才能を見抜き、「世界はやがてこの人を知るであろう」と言ったと伝えられる。そのハリファックスが高給を与えられていたことから、県議会で解任しようという動きがあった。そのとき、すでに卒業して東京にいた朝河は、県議会に書状を送り、いかに外国人教師が必要であるかということ、単に語学の見地からのみでなく、世界を知り、今という国際交流、国際化のために、いかに必要であるかを、このまだ二十歳に満たない青年が、堂々と論じたのである。そこに述べられている英語教育観ないし英語教育法は、現在これを持ち来たつたとしても、優に活用しうるすぐれた論説であるという評価を得ている。

朝河貫一は笈を負うて上京し、苦学しながら、早稲田大学の前身、東京専門学校に学び、この間、本郷教会で横井時雄から洗礼を受け、クリスチャンとなった。東京専門学校をもまた平均九十四点という優れた成績で首席で卒業し、大隈重信、坪内逍遙、大西祝等の期待を負い、その支援を受けて、アメリカに渡り、横井時雄の友人、タッカーが学長であるダートマス大学に学んだ。そこをまた首席で卒業し、アメリカで五指の中に入る名門イエー

ル大学の大学院に進み、歴史学を専攻し、P.H.D.をとり、以後、イエール大学講師、助教授、準教授を経て教授となり、一九四二（昭和一七）年に定年を迎えて退官のさいには名誉教授の称号を贈られた。日本へは二回もどっただけですつとアメリカで過ごし、アメリカの女性と結婚し、第二次世界大戦後、一九四八（昭和二三）年に現地で没した。

第二回帰朝のさい、約一週間、鹿児島県薩摩郡入来村の「入来文書」の調査・書写におもむき、この中世のいわゆる封建制時代の文書で全く手つかずのまま残っていた史料を復元し、英訳し、それに専門の比較法制史の立場から詳細な注をつけ、『入来文書』として英文で一九二九年にアメリカとイギリスで刊行した。これによって朝河貫一は世界の学界に揺るぎない地歩を確立したのであった。

封建制ということとは、ふつうヨーロッパの封建制とか、徳川時代の封建制とか、やや安易に用いられているけれども、朝河貫一が歴史実証的に明らかにしたところによると、ヨーロッパでのいわゆる封建制と、日本での封建制度、あるいは中国での封建制は、かなり異なる点のあることが知られる。別な言い方をすれば日本の封建制には独特のあり方があるということである。そこで、日本では徳川時代の封建制はいわゆる暗黒時代のもので、それが、鎖国とともに、明治維新で打破され、それ以降、近代化すなわち西洋化が進められたなどと言うことは、素人の誤りであって、む

しる中世近世に封建制といわれたもののうちには、近代日本へとつらなり、その基盤をなすようなあり方が隠されていたということなのである。このような歴史事実の分析・把握は、例えばE・O・ライシャワーに影響を与え、ルース・ベネディクトもまた『菊と刀』の中で、『入来文書』に言及するというような波紋を生み出しているのである。

ところで、朝河史学とも言うべきこのような研究分野で用いられた方法は、まさしく「比較」なのである。朝河貫一はその講義において七ヶ国語を駆使してヨーロッパ諸国のいわゆる封建制と日本の封建制とを比較・分析してみせたと言われている。その業績は、いちはやく、フランスの優れた経済史家、マルク・ブロックの認めるところとなり、マルク・ブロックの主宰する『アナール』誌、詳しくは『経済社会史年報』(Annales d'histoire économique et sociale)への起稿依頼となった。朝河貫一はこれに応じ、「日本の経済社会史における宗教の位置」という論文を『アナール』誌の一九三三年第五巻に載せ、宗教の役割の重要性を指摘している。また彼自身、「比較」という方法を用いて成果を挙げたと述べてもいる。マルク・ブロックもコメントで、朝河史学の業績はその比較的方法による、と述べているのである。

朝河貫一は、日露戦争のときすでにアメリカにおり、まだ三十歳そこそこの若さで、アメリカ各地で日本弁護の講演を行い、ポーツマス条約締結のさいはオブザーバーとして参加し、またた

えず大隈重信、金子堅太郎、伊藤博文等の日本の政治家・識者らへ手紙を出して、日本の進路を憂えて進言をおこなった。日露戦争以後、日本が満洲へ進出するようになると、朝河貫一は、中国の領土保全・自主独立を侵すことのないように、しばしば警告を発し、ついに一九六六(昭和四二)年十二月、日米開戦に先立って、戦争をやめようというアメリカ大統領ルーズベルトの親書(朝河起案)を日本の昭和天皇へ送ることを企て、親友のラングドン・ウォーナー(戦中には奈良・京都を爆撃しないように進言したといわれる、戦前日本に学んだ美術史家)とともにこれを進めたが、十二月七日、一瞬時おそく、真珠湾攻撃が開始されたというようなエピソードも残されている。

このような思想と行動をつらぬいているものは、朝河貫一の名(それは論語の「一を以て之を貫く」に由来する)が示すとおり、一貫した愛国心、世界大の正義感であるといえる。それが、ままたるように、単に極端な主観的な感情に走らなかつたのは、歴史家としての朝河貫一の客観的な厳密な学究態度のゆえであると考えられる。

早稲田大学とその周辺

さきに述べたように、「比較思想と早稲田大学」について語るには、「早稲田大学とその周辺」に触れなければならない。早稲田大学のまさしく周辺というのは、周辺にあって、早稲田大学の

中軸へのかかわりにおいてこれを支え、これを進展させる力であると同時に、早稲田大学の内にありながら、周辺へと出て、むしろそこに本領の発揮される場を得た人たちの力をも意味する。

さきほど触れた、まさに周辺人である綱島梁川の師であり、朝

河貫一の師でもある、明治期の傑出した学究者・思想家である、

大西祝^{はら}（一八六四「元治元」―一九〇〇「明治三三」）の名をここで逸

することができない。大西祝はれっきとした早稲田大学のスタッ

フであるが、周辺で非常に活躍した人物である。それかあらぬか、

例えば『広辞苑』では「哲学者・評論家。号は操山。岡山の人。

『六合雑誌』を編集、「丁酉倫理会」を創始。明治期の功利啓蒙思

想の理想主義的転向に寄与。」とある。つまり早稲田大学（東京専

門学校）教授などとは記してない。明治十五年に東京専門学校が

設立され、明治二十五年に早稲田大学という名称となるが（ただ

し正式の大学令による大学となるのは、私学一般がそうであるように大正

九年）、この間、まだ早稲田大学自体からはスタッフが育たず、

初期においては、当時の東京帝国大学出身者が早稲田に来て、早

稲田をつくっていったのである。坪内逍遙・高田早苗・天野為之

等々、すべてそうである。大西祝もまたその一員であった。彼は

大学院の卒業の論文としてまだ若冠二十五、六歳のときに書いた

「良心起源論」は、西田幾多郎にも影響し、倫理学における主要

問題の一つである「良心」の問題を論ずるさい、今もってこの論

文を無視しえないのである。彼は主として倫理学の領域において

業績を挙げたが、倫理学の方法の一つとして「比較攻究法」を立て、究極の段階ではないが、一つの方法として認めていることに注目したい。しかも、そのような比較の方法をいわずに「ノリとハサミ」式に、とってつけたような使い方をするのではなく、彼の業績を見ると、比較ということが彼の学問の血肉となり、そこからして彼の立言もまたなされているということが知られる。教育勅語が發布され、内村鑑三の不敬事件が起こり、教育と宗教、教育と倫理との衝突がかまびすしく論議されたとき、大西は、各国、各民族の倫理道德を比較攻究すると忠孝がすべてにわたって根本倫理とはなっていない、根本的なものとして挙げられるのは「誠」であるというように論じている。大西はいわゆるカント学者ではないが、カントの理性主義、批判主義をよく身に体し、しかも他方、歌人として文芸を理解し、評論等にも活躍した。そのような一種のマルチ人間であった大西こそ、比較思想家の比較思想家たるゆえんの大事なものを保持していた思想家であると言いたい。

早稲田大学の学問の伝統の一つに在野精神が挙げられると述べた。日本へまず移植された西洋思想はイギリス・フランス思想であり、ついで明治十年代からドイツ思想もまた移植され、それがアカデミズムを支配するようになった。この間、アメリカ思想、プラグマティズムも、明治三、四十年代に日本に移植されたが、早稲田大学とその周辺は、在野精神に適合するものとして、この

プラグマティズムという現実主義を受け入れた。プラグマティズムは、しかし、単なる現実主義ではなく、理想主義にして現実主義であると考えるべきであるが、『書齋より街頭へ』を著した田中喜一、王堂は、桑木敬翼との論争を通じて、プラグマティズムを日本に植えた早稲田人である。この流れに石橋湛山が出て、『東洋経済新報』により、大日本帝国主義のはなやかな時代に『小日本主義』を唱え、領土拡張主義に敢然と反対した。帆足理一郎もアメリカでデューイに学び、帰朝後、大正、昭和期へかけて、人生哲学の個人雑誌『人生』を出して、活発な啓蒙思想運動を行い、植田清次は戦後ザラ紙の時代に『西田哲学とデューイ』を出して、歴史的的生命主義が西田哲学とデューイに共通であるとした。

朝河貫一と同年の一八七三（明治七）年に生まれた津田左右吉は、朝河とは対照的に、日本を離れることなく、しかし共に日本古代史の研究から始め、歴史実証主義というほぼ同じ立場から研究を進めた。ただ津田は日本古代史、神代史から中国思想、道教・儒教へ、そして『文学に現われたる国民思想の研究』など日本思想史にも新しい光を投げかけた。津田は、『シナ思想と日本』（一九三八「昭和二三」）で、比較思想に関して二つの大事なことを述べている。一つは「世間では、ニホンとシナとの両民族が互に提携してゆかなくてはならぬ、といふことと、ニホンの過去の文化とシナのそれと同じ一つの東洋文化として見る、といふこと

とが、混雜して考へられてゐるのではないか、と思はれるが、この二つはもと／＼全く別のことである。ニホンとシナとの文化が過去にどういふ關係にあつたとしても、それにはかゝはらず、両民族の提携は必要である。しかしそれには、ニホン人とシナ人とが……別々の文化を形づくり別々の民族性を養つて来た、全くちがつた二つの民族であることを、ニホン人もシナ人も十分に知つてかゝらねばならぬ。」であり、日本と中国とを同文同種の民族だというように簡単につなげてはいけないということである。もう一つは、趣旨は同じであるが、『東洋文化とは何かといふ問題』には、西洋文化といふものに對立する意味に於いての東洋文化といふものがあるといふことが予想せられてゐるものと見なし、さういふ東洋文化が一つの文化として存在しないといふことを述べたのである。」という点である。東洋文化と西洋文化というコントラストを単純に用いることへの批判である。この批判は比較思想の基礎づけに資するところ大であると考えられる。

早稲田大学の学問の潮流の一つに宗教哲学研究を挙げることができる。波多野精一（一八七七「明治一〇」—一九五〇「昭和二五」）は、結局、京都帝国大学へ移り、そちらでいわゆる宗教哲学三部作をなしたわけであるが、東京帝国大学を出て若冠二十四歳のとき著わした『西洋哲学史要』は簡潔にして文章も玲瓏、名著の名をほしいままにし、今日でも座右の書となっている。波多野が早稲田大学の学術の進展に寄与したところは甚大であり、若き学徒

への影響もじつに大きなものがあつた。この後を受けて大正期には仏教の伊達保美（『宗教哲学研究』）、キリスト教の河面仙四郎（『宗教哲学』）、そして帆足理一郎（『宗教哲学概論』）、仁戸田六三郎（『信仰の論理』）と続く。このほかに、金子筑水（大隈重信の遺著『東
西文明の調和』をまとめた）、村岡典嗣（東北大学へ移つて日本思想史
講座を初めて開設、北畠吉（『哲学行脚』、今日の自民党の創設にたずさ
わつた、『哲学から政治』）等々の思想群像があり、岩崎勉（アリスト
テレス『形而上学』本邦初訳、講談社学術文庫で復刊、比較倫理を唱え
る）、榎山欽四郎（ヘーゲル研究、道元・親鸞に学び最後の著書『悪』
は実質的に比較思想研究、前出の松浪信三郎、仁戸田六三郎（没後
『仁戸田六三郎宗教哲学論集』）、そして比較宗教哲学研究の線は小山
宙丸（『比較宗教哲学への途』単著）、峰島旭雄（『浄土教とキリスト教』
——比較宗教哲学論集——編著）と引き継がれている。

「比較思想と早稲田大学」のテーマは「早稲田大学とその周辺」
にかかわり、「比較思想とその周辺」にかかわり、「比較とは批判、
自己吟味」ないしは「私の中の比較思想」という視点から見返す
とき、日本近現代学術史、思想史の中で、早稲田大学の自由な学
風に育まれて、比較思想のややディレクショナルな風潮の豊かな
土壌から、各人各様の広義の比較思想が実を結んでいると言える
であろう。これを学問の形態として、主体的な厳密性を伴った体
系へと練り上げていくところに、今後の課題が存すると言ふこと
ができる。

*現在の早稲田大学での比較思想関係の研究機関・講座等として次のこ
とがある。

文学部に比較文学研究室、法学部に比較法研究所、人間科学部に人間
総合科学研究センター（土曜講座「生活の質」で「大衆長寿時代の死に
方」をテーマに「死の文化的多様性」「生と死のバイオエシックス」等
の講座）が設置されている。人間科学部では井深大寄付講座「東洋医学
の人間科学」があり、「いまなぜ東洋か」「氣の身体論」「禪のセルフ・
コントロール」等の講座がある。文学研究科（大学院）に比較文学、比
較文化論、宗教学特講（比較宗教哲学研究）、教育学研究科（大学院）
に比較教育学、社会科学研究科（大学院）に社会科学総合研究（異文化
理解）、比較文化論、比較経済・労働問題論、比較政治・社会問題論、
理工学部には比較を含む総合講座、商学部には比較文化論ゼミがあり、社会
科学研究所に比較近代文化部会、比較政治社会思想部会、比較近代化部
会等があり、同所では「大隈重信と大日本文明協会」（一九八九）、「大
隈重信と文明運動」（一九九〇）の展示・講演を行い、同所創設五十周
年（一九九〇）記念として大隈重信遺著『東西文明の調和』を復刊した。
なお文学部での演劇研究、坪内逍遙記念演劇博物館では、比較演劇学
（坪内逍遙―河竹繁俊―河竹登志夫―鳥越文蔵）の流れがある。
*早稲田大学関係者によるごく最近の比較思想関係研究成果としては次
のごときがある。

小山宙丸『比較宗教哲学への途』、中村元監修・峰島旭雄責任編修
『講座、比較思想、転換期の人間と思想』全三巻、峰島旭雄・河波昌・
伴博・谷口龍男・浮田雄一編著『比較思想の展開』、福井文雅『欧米の
東洋学と比較論』、福井文雅『中国思想研究と現代』。

（みねしま・ひでお、比較哲学・宗教哲学、
早稲田大学教授）